

仏様のおはなし新シリーズ第138集「稀有」

お釈迦さまご在世のある日の話。川のほとりを歩いていたらお釈迦さまは立ち止まって足元の砂を掴み、弟子に「この手の中の砂の数と大地の砂の数とでは、どちらが多いだろうか」と尋ねられました。「掴んだ砂の方が少ないです」と弟子が答えると、お釈迦さまは「その通りである。数え切れないほどある大地の砂は、この世界に生まれたあらゆる生き物の命を表している。その中で人間として生まれた者は、この一握りの砂の数である。」とおっしゃいました。

そして今度は、手の中にある砂を自身の指の爪の上にゆつくりと落とし、ていられると、そのほとんどは下に落ちてしまい、ごくわずかの砂が爪の上に残りました。「御覧なさい。たまたま人間に生まれたとしてもこの爪の上に残っている砂の数のように、仏の教えに出遇えるのは稀有なことである」とお釈迦さまはおっしゃいました。

私たちは誰一人として自らの意思で、人間に生まれてきたわけではありませんが、いつ、どの地域に、どの親のもとで男に女に生まれようと考えて誕生しておりません。

仏教経典には、優曇華（うどんげ）または靈瑞華（れいずいげ）とも表記され、三千年に一度その花を咲かすといわれるため「きわめてまれなこと」「めつたにないこと」の意味を持つ名前の花が出てきます。

親鸞聖人が著述された『教行信証』行巻には、「今、人として生れたことを考えると、それは実に得がたいことである。このことは、たとえば、優曇華がはじめて咲くようなものである。今まさに、聞きがたい浄土の教えを聞く縁に会うことができた。」とあります。

生まれ難い人間に生まれたということをよくよく考えてみますと、それは、日々、右往左往する私を目当てとして、「見過ごせない。必ず仏にする。」と誓われた阿弥陀如来のお慈悲との出遇いであり、苦悩の中にいる私が仏になる機縁を頂いたということでありました。

浄土真宗本願寺派福岡組



福岡組

検索